

【概要】

文学教育の題材としての小泉八雲

——富山大学の近年の実践例をもとに——

小谷 瑛輔

1、富山大学の教育における小泉八雲

富山大学では、小泉八雲の蔵書をヘルン文庫として保管しているが、学生生活の複数の局面で八雲に親しんで貰う仕掛けが用意されており、また、教育においても多様な形で八雲を活用した実践を行っている。文学教育においては、まず作家の存在を知り、身近に感じるかどうかを対象に向き合う学生の姿勢を規定する大きな要素であるため、はじめにそれぞれ簡単に確認しておきたい。

まず、五福キャンパスの学生が学修の拠点とする中央図書館では、入り口に常にヘルン文庫の案内が掲示されており、毎月第2・第3・第4水曜日にはヘルン文庫の部屋を開放してボランティアスタッフなどによるガイドが受けられる。またヘルン文庫の部屋の前には、閉室中も八雲について基礎的なことを知ることができるような展示物が常時置かれている。

学外者にはあまり知られていないことだが、学生が八雲の存在を感じるのはいずれでもない。富山大学では、履修登録システムが「ヘルンシステム」と名付けられており、ログイン画面で大きく八雲の写真が表示される。「また Hearing（聞く）、Network（ネットワーク）という意味を込めた、皆さんの意見に耳を傾けながら実現していくネットワークシステムです」との説明もあり、学生主体の教育理念の象徴としての位置が八雲に与えられている。

さらに、生協食堂では2012年から「ヘルンランチ」という名のメニューが提供されており、これは八雲が *La Cuisine Creole: A Collection of Culinary Recipes* (1885) で紹介した gumbo という料理をアレンジしたものである。現在は「ガンボライス」という名称で提供されているが、このように、学生は多くの局面で「ヘルン」の名や存在を身近に感じる環境が作られている。

さて、具体的な教育の中でどのように八雲が扱われているかを紹介するのが本報告の趣旨であるが、まず人文学部の1年生向け教養教育「基礎ゼミナール」について触れておきたい。富山大学では、1年生で教養教育を受け、2年生から学部の専門教育に移っていくという形になっているが、人文学部の1年生が受ける数少ない専門の科目として、「基礎ゼミナール」というものがある。この授業では、中央図書館の協力のもと、図書館の使い方ガイドの回を設定する教員が多いが、学生はそこで図書館職員にヘルン文庫を案内して貰い、八雲という人物についての基礎情報や、ヘルン文庫の来歴などについて一通りのレクチャーを受けることになる。人文学部の学生の多くは、入学して間もない時期に、八雲やヘルン文庫についてのあらかたの知識を得ることになって

いるのである。

人文学部以外の 1 年生が受けることのできる授業として「教養原論」科目の中の一つに「日本文学」というものがあり、稿者はこれを担当している。この授業では明治期に日本がいかに関西文学を受容していったかという文脈で、八雲について触れるようにしている。また、人文学部の 1 年生が後期から履修可能な授業として「日本文学史」があり、ここでも同様に八雲を扱い、よく知られている「雪女」「耳なし芳一」「ろくろ首」などの怪談の作者が八雲であることを説明するが、普段八雲の名を頻繁に目にしている学生も、親しんできた作品の作者であるというようには結び付いていない場合も多く、ここで初めて知るという反応がよく得られる。その八雲が東京大学で英文学を講じ、日本の西洋文学受容において重要な役割を果たしたことを述べて、文学史の流れの中に八雲を位置付けて貰う。

人文学部の学生は、2 年生からコースに分かれ、それぞれの分野で卒論執筆に向けて専門的な学修を開始する。そこから開始される演習形式の授業「日本文学演習」「日本文学講読」では、学生が自ら題材を選択して発表を行うが、稿者はこれらの授業で八雲を扱うことを慫慂し、あるいは八雲を題材として選びやすいようなテーマ設定を与えており、その結果、毎年複数の小泉八雲に関する発表がなされている。以前に聞いた八雲についての発表から得られた知見や問題意識を生かして、自身の八雲についての研究発表に活かす、という連鎖が続いており、ゼミ全体で八雲への理解が深まっていっていることを感じているが、こうした中で、卒業論文のテーマに八雲をテーマとして選ぶ学生も毎年見られるという状況が生じている。ヘルン文庫は、八雲の蔵書に加えて、八雲関係の研究書など二次資料も収集しているため、八雲をテーマとした研究は行いやすい環境が整っている。日本文学研究一般のための資料面でいえば、富山大学は全国的に恵まれた環境とは言えないが、八雲を研究する上では非常に恵まれた状況となっているのであり、富山大学で八雲を研究テーマの候補として考える学生が出てくることは、望ましいことと言える。

また、富山大学ヘルン（小泉八雲）研究会では、原則メンバーのみの参加のもとで例会を行ってきたが、教育上の効果を考慮して、2017 年度から、学生の聴講を認める試みを始めている。これに加え、毎年開催される八雲関係の講演会やシンポジウムには積極的に参加するよう学生たちに呼びかけており、八雲の研究の最先端の状況を知る機会を与えるよう努めている。

2、人文学部の学生・卒業生による研究成果の紹介

シンポジウムの発表では、日本文学教育において小泉八雲を扱う中で見えてきた教材としての特徴や課題について述べたが、これについては今回の報告原稿では割愛し、ここでは人文学部の学生・卒業生による研究成果についての報告のことをまとめておきたい。

稿者の着任前の学生のものになるが、精力的にハーンについての研究に取り組み、現在もその成果の報告を続けている今村郁夫のものをまず挙げておきたい。今村は、ヘルン文庫の和漢書の書き込みを網羅的に調査し、それをまとめるという「ヘルン文庫書き込み調査：和漢書を中心に」

『富大比較文学』2008年11月)、「ヘルン文庫の和漢書：蔵書傾向と書き込み調査」(『富大比較文学』2010年12月)などの論文を発表している。また、今村はこれらを通じて得られた成果として、『狂歌百物語』への書き込みを分析した「小泉八雲のヘルン文庫——『狂歌百物語』への書き込みの考察」(『社会文学』2009年2月)や、書き込み調査に基づく八雲の「常識」の典拠論・生成論である「小泉八雲『常識』研究—ヘルン文庫書き込み調査から—」(『富山大学大学院人文科学研究科論集』第9集、2011年2月)、「原典の書き込みから見る小泉八雲「常識」——ヘルン文庫調査から」(『群峰』第3号、2017年3月)を発表している。「常識」には典拠について複数の説が唱えられている中で、ヘルン文庫にある「宇治拾遺物語」に、小泉セツによると見られる書き込み、しかも典拠から八雲の作品への変更に直接関わる書き込みが多数あることを整理したものである。

これらの論文は個別の研究成果として堅実なものと言うべきで、また前者の網羅的な書き込み調査も、八雲の日本古典文学受容を検討する上では最も基礎となるべき仕事と言うべきだが、残念ながら、これらに関わる研究動向において、上記の研究が参照され、十分に活かされているとは言いがたいのが現状のようである。

たとえば「常識」論でいうと、今村の研究は2011年に発表されているが、その後に刊行された長谷川洋二『八雲の妻』(今井書店、2014年)や中井孝子「ハーンの妻セツの役割の再検討」(『多元文化』2017年2月)など、今村と同様に「常識」について典拠や妻セツとの関わりから検討している文章では、今村の研究は触れられていない。これは、八雲の研究において、それまでの研究の成果を集約して全体的に把握できる体制が整っていないという問題によるものと思われる。加えて、今村の研究が発表された『富山大学大学院人文科学研究科論集』は、全国の多くの大学の図書館に寄贈され、所蔵されてはいるものの、論文題目がデータベースに拾われておらず、検索において見落とされてしまうという事情もある。

文学研究の現在の状況というのは、踏まえるべき知見や論文が膨大になり、一人の研究者がそれら全てを把握することの困難が増しているのを、電子技術の進展が補っているようなところがある。すなわち、論文データベースの検索で見つかる論文は参照され、そうでない論文は参照されなくなっていく必然があるわけだが、こうした時代において、リポジトリへの搭載や、少なくとも主要なデータベースのいずれかには論文題目が登録されることが、研究成果の共有のためには重要になってくる。

今村の富山大学での指導教員でもあった金子幸代が立ち上げた「富山文学の会」という研究会で毎年刊行している研究雑誌『群峰』というものがあるが、今年度から富山大学のリポジトリに論文を登録することが可能となった。今村の論文も、「常識」論の成果をまとめ直す形でここに掲載され、稿者も協力してリポジトリでの閲覧やデータベースでの検索が可能となったわけである。

最後に、富山大学の学生による近年の研究成果も紹介しておきたい。2016年度卒業論文をもと

にした三島佳音「ラフカディオ・ハーンにおける日本語の音」(『富大比較文学』、2017年3月)は、八雲が『骨董』『怪談』で日本語の音をローマ字表記によって取り入れた箇所を網羅的にまとめ、セツの出雲方言の影響が見られるものを抽出して、方言研究の成果を参照しつつ考察したものである。2017年度の卒業論文としては濱野美典「児童文学史における小泉八雲の位置づけについて」があり、こちらもリポジトリなど何らかの形で公開できることを目指しているので、内容はそちらを参照されたい。今後の学生や卒業生による研究成果も、新たな時代に対応した発信の体制を維持していきたい。